

2014年2月2日 聖餐礼拝

説教 神さまが避難所

詩篇 46 篇

### 【私たちの避け所】

私たちの生涯には思いがけないことがある。ほんとうに思いもよらないできごとが起こるとき、私たちは無力で、抵抗する気力も失せてしまうことがある。とほうにくれて、頭の中がぐるぐる回るばかりという経験をどなたもお持ちであろうと思う。いったい私たちの逃げ場はどこにあるのか。私たちの避難所はどこなのか。「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け」(1)。聖書はそれを神さまだと教えます。

### 【紀元前 701 年】

詩篇 46 編の背景は、紀元前 701 年のできごと。アッシリヤの王セナケリブが数十万の大軍を率いてエルサレムを包囲しました。ところが、イザヤ書の 37 章に「主の使いが出て行って、アッシリヤの陣営で、十八万五千人を打ち殺した」(36)とあります。この結果アッシリヤは撤退し、エルサレムは神さまによって守られました。絶体絶命のところをかまくわれたのです。

### 【海のまなかに】

「それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも」(2)も有名なところ。「地」というのは聖書では決して動かないものの象徴です。想像を超えたできごとが起こっても、「われらは恐れない」のです。大震災であっても、大津波であっても、私たちには神さまが共にいてくださるからです。

いつか、ほんとうに大きな異変が世界を覆うことがあるかもしれません。新しい天と地が創造されるためには、私たちには思いもよらないような

できごとが起こるのでしょう。けれども、そんな中でも神さまは私たちを手放すようなことは決してありません。それは十字架を見ればわかります。十字架の上で、主イエスは私たちを手放しませんでした。私たちを手放したら、父との断絶の苦しみをのがれることができたのに、主イエスは私たちを手放さなかったのです。

### 【紀元 1521 年】

さきほど、新聖歌 280「神はわがやぐら」を賛美しました。作詞/作曲はルター。ルターはごく少数の友人とともに、当時の世界のすべてともいえるローマ教皇に立ち向かいました。紀元 1521 年、ルターはすでにローマ教皇からすでに破門されていましたが、それだけでなく世俗の支配者カール5世も、ルターを議会に呼び出し、財産やすべての法的権利を剥奪しました。その会議が開かれたのがヴォルムスという町。ここに出かけるときのルターの有名なことばが、「たとえ、ヴォルムスの屋根の瓦ほど多くの悪魔がいたとしても、それでも私は行く」。なぜ、ルターはそうに言うことができたのか。神さまはルターの避難所だからです。神さまがルターを守るやぐらであるからでした。「万軍の主はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりでである」(11)のみことばどおりに神さまはルターをお守りくださり、やがてこの賛美歌が誕生したのです。

### 【死の淵を見た男】

「死の淵を見た男・吉田昌郎と福島第一原発の 500 日」という本があります。原発の発電所長だった吉田昌郎氏を中心にあのとき原発で何が起こっていたかをインタビューして書かれたもの。地域を救うために、死を覚悟して原発に踏みとどまった人びとの闘いの記録です。

彼らはおそらく、いやほぼまちがいがなく、クリスチャンではない人々。その人々が、自分を他の人々のためにささげてしまっています。私たちは、

ときに、クリスチャンでない人には、神さまの恵みが働かないように思ってしまうことがある。それは大まちがいです。人が友のために、命を捨てることができるとしたら、それは神さまの恵みが働くときだけです。神さまはそこまで恵み深いのです。神さまを信じていない人にもはたらいて、その人を通して他の人に恵みをおよぼすのです。愛のわざをさせるのです。「それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても」(2-3)とあります。神さまは、まさにそんな状況の中でも彼らと共にいてくださり、彼らとともに働いてくださったのです。

### 【地の果てまでも】

神さまは、クリスチャンでない人にも恵みを与え、彼らと共に働かれます。けれども、やはりクリスチャンにしかできないことがあります。神さまには、私たちを通してしかすることができないことがあるのです。「主は地の果てまでも戦いをやめさせ、弓をへし折り、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる」(9-10)とあります。私たちの使命とは和解をもたらすこと。ゆるしあい、受け入れ合い、癒し合う生活です。確かに、人のために命を捨てることは尊いことです。けれども、長い年月の間、赦し、受け入れ、とりなし続けることはさらに尊いことです。それは、主イエスの十字架の血によって、赦され、受け入れられ、癒されて初めてできることです。神さまの守りによって、私たちのうちに始まっているこの恵みを、もう一度聖餐によって新たにさせていただくようではありませんか。

